

(近刊著書紹介) 貝塚茂樹 『天野貞祐—道理を信じ、道理に生きる—』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 貝塚, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/855">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/855</a>

(近刊著書紹介)

『**天野貞祐**——道理を信じ、道理に生きる——』  
(貝塚茂樹、ミネルヴァ書房、2017年4月刊)

貝塚 茂樹

### 1. 天野貞祐との出会い

天野との出会いは、修士論文を書いた頃であったので、かれこれ30年前に遡る。論文の史料収集の際にたまたま目にしたのが『道理の感覚』(岩波書店、1937年)であった。衝撃を受けた。その後は、手当たり次第に天野の文献を集めて読み込んでいった。天野自身、内村鑑三の著作『後世への最大遺物』との出会いを「精神的革命」と称したが、私にとっての「精神的革命」は、天野の数々の著作であった。

これまで、天野についての研究論文を発表し、その大部分は『戦後道徳教育の再考—天野貞祐とその時代—』(文化書房博文社、2013年)として刊行した。本書は、その成果を土台としながら、天野の人生を評伝として再構成したものである。本書の構成は、以下のようになる(全472頁)。

はしがき

第1章 挫折と立志

第2章 内村鑑三とカント哲学

第3章 京都帝国大学と『道理の感覚』

第4章 第一高等学校校長と戦後教育構想

第5章 文部大臣と道徳教育・「平和」問題

第6章 獨協大学と戦後教育批判

第7章 自由学園とキリスト教

第8章 追悼と遺産

主要参考文献

あとがき

天野貞祐略年譜

人名・事項索引

### 2. 「徹底的惨敗者」とは

「徹底的惨敗者」——。天野貞祐は自らをしばしばこう称した。京都帝国大学教授、第一高等学校校長、文部大臣、中央教育審議会会長、獨協大学学長。およそ挫折とは無縁の輝かしい経歴の一方で、天野の辿った人生は必ずしも順風満帆ではなかった。

怪我による旧制中学校の中退と四年遅れての再入学。就職で味わった屈辱。「命をかけた書」である『道理の感覚』の「筆禍事件」と「自主的絶版」。甲南高等学校での衝突。第一高等学校校長として直面した学制改革の中での旧制高校の廃止。吉田茂から「三顧の礼」で迎えられた文部大臣時代には、道徳教育振興の提案は退けられ、義務教育費の国庫負担をめぐる池田隼人蔵相との激しい対立によって辞職を余儀なくされた。また、「生涯最後の、そして決定的な賭け」として取り組んだ獨協大学の理想と理念は、大学紛争の荒波に翻弄され、学長を辞任した。おそらく、天野ほど「辞表」を書いた人物は少ないに違いない。

本書が刊行されて以降、天野は決して「徹底的惨敗者」ではないのではないかと。特に、旧制高校を廃止して新制大学に統合したことや「修身科」復活の意味は今こそ問い直されるべきではないか、という感想やご意見を数多く頂戴した。この点には私も賛成である。正直に言えば、本書を書き始めた当初は、むしろ今日の観点から「徹底的惨敗者」という言葉の意味を問い直し、天野のこれまでの評価に対するある意味での「名誉回復」を主張したいという気持ちがなかったわけではない。

しかし、天野の人生を辿っていくにつれて、そうした関心と意欲は次第に薄れていった。天野の「名誉回復」というよりも、天野が自らをそう評した思いに正面から向き合ってみたと思ったからである。そして、そこから見えてきたのは、激動の時代にもがきながらも、必死に「格闘」し続けた天野の姿である。「徹底的惨敗者」とは、決して「敗北宣言」ではなく、時代と「格闘」した者だけに許される透徹した孤高の「境地」の表現であったように思える。

### 3. 「道理を信じ、道理に生きる」

天野の生涯を豊かにしたのは、恩師・友人との数多くの出会いである。内村鑑三、新渡戸稲造、岩元禎、西田幾多郎、田辺元、岩波茂雄、安倍能成、和辻哲郎、九鬼周造、岩下壮一、森戸辰夫、吉田茂、羽仁もと子・吉一夫妻など。天野はその出会いによって多くを吸収し、それらを自らの中で練り上げ、少しずつ醸成していった。

天野が世間から注目されるのは遅い。第一高等学校校長となったのは62歳。文部大臣に就任したのは66歳の時である。あたかもそれは、長い時間をかけて多くの恩師・友人との関わりから得た遺産を醸成・蓄積し、それらを跳躍台とすることで一気に歴史の表舞台に躍り出たようである。しかもそのことは、天野の出会った恩師・友人のうち、誰一人が欠けても実現しなかったに違いない。

もちろんそれを可能としたのは、恩師・友人にとって、天野が信頼に足る人物であったからである。天野は時として激しい「戦闘者」でもあった。しかし、それは天野が常に「道理」に基づいて行動した結果であり、自らの「道理の感覚」から決してブレることはなかったからである。その一点に、恩師・友人は天野に対する無条件の信を置いたのである。

「道理を信じ、道理に仕え、道理のために力を尽くし、道理の媒介者となること」。天野は自らの人生観をこう表現した。おそらくそれは、恩師・内村鑑三のいう「高尚にして勇氣ある生涯」を理想として実現することでもあったはずである。

#### 4. 刊行の後

文字通りの拙著であったが、幸いにも刊行後には多くの言葉を頂戴した。なかでも、納富信留氏（東京大学）は、『読売新聞』の書評（2017年5月14日）において、天野を「徹底的惨敗者」としながらも「この本格的評伝を読むと暗い気持ちになるどころか、救われた印象さえ受ける。一貫した信念と教育にうちこむ哲学、そして常に前を見つづける生き方が、最終的に報われたことを感じさせてくれる。確かに目立ちはしないが、信頼される人柄であった」と評した。

著者の手を離れた以上、著作がどう評されるかは著者の問題ではない。しかし、著者が新たな視点を発見することはできる。納富氏の言葉は、私が考えていた天野とは違う天野を発見させてくれた。

その他、複数の読者から天野に関連する資料や感想を多く頂戴した。天野が大事にした人との縁を感じた経験であった。本書の「あとがき」には、「本書を書き終えたばかりの今は、安心感と虚脱感が入り交った気持ちが先立ち、改めて内容に思いを巡らす余裕と気力がない」と書いた。しかし、ここに来て、また新しい天野に出会いたいという気持ちがふつふつと湧きあがってきている。書きたいこと、書かねばならないことはまだまだある。また違った天野と出会えるような気がしている。